

我々保育界も亦呼應して立ち、協力し、併せて此の好期に託兒の必要を社會的運動から教育的必要の運動に到らせ度い存じます。

尙、幼稚園の使命の再吟味されるまき保母養成所についても此の機會に大方諸賢より充分の御檢討を願つて、時代の必要に緊密にそひ、保育報國の誠を盡し度く念じます。

保母養成事業の重要性

——主としてその主體的方面に就いて——

仙臺 太陽 保育學園

近時保母養成所と言はれるものが全國的現象と言へないまでも増設の氣運を辿りつゝある事は、幼兒保育の發展上望ましい事であるのみならず、且又當然の事と言はねばならぬ。茲に更めて保母養成事業の重要性に就いて語ることは極めて緊要であり、此の機會に於て今こそ各方面からの再吟味が腹藏なくなさるべきであると思ふ。扱て此問題に就いては二つの方面が考へられる。一は保母養成事業なるものが何故に重要であるかの検討であり、他は保母養成事業内に於ける重要な點の究明である。此の兩者は密接不離の關係にあり前者が社會的存在條件に依存するに對し、後者が當該關係者の意識的努力に依存するものなる事は敢て言ふまでもないことである。更に後者にあつては又種々なる視角よりする夫々の考察がなされねばならぬであらうが、所謂養成所相互間の連絡機關の設置等に見るが如き組織的方面の課題に關しては暫く筆を

措き、此等内部的諸問題を現實的に規定してゐるであらう處の根本課題に就いて一言しようと思ふのである。

試みに今我國心理學者の名簿を繰り披いて見るに、近時その兒童心理學的研究に従事するもの、夥しく多數なるに於ては何人も雖も一驚を喫せざるを得ない現状である。敢て心理學の世界に限らず所謂兒童研究なるものが今日盛んに社會學、醫學等の世界に於ても行はれるに至つたことは何人も周知のことである。併し乍ら此等の場合に於ては、研究の對象が等しく兒童に置かれてゐるにしても、それは心理學、社會學、醫學の見地より行はれる兒童研究であり、従つてその研究方法の同一であり得ないことは勿論であるが、要之今日如何に兒童に對する關心が急速に昂められつゝあるかの事實を物語るに充分である。更に最近に於ては兒童學なるものが新なる立場に於て究明されつゝあるに鑑み、他方幼兒保育の側に於ける現状は果して如何。成程、我國幼兒保育の搖籃は基督教傳道事業の一角にその端を發して居り、爾來その發展を此に負ふ所極めて甚大であつたことは何人も否定し難き事實であるが、斯くて漸く幼兒保育の時代性に醒めたる人心は我國諸般の事情と相俟つて、茲に基督教保育以外に佛教保育並に所謂教育的保育でも謂はるべき幼兒保育の擡頭發展を見るに至つたのである。斯くて又、幼稚園保育、託兒所保育の全面的發展を可能ならしめたる社會的條件の下に、曾て傳道的使命を以つて成長し來りたる幼兒保育事業なるものは、一方幼兒保育そのもの、理論的構成に貢獻しつゝ他方本意であるにもせよ傳道保育それ自體に於ける傳道性そのもの、積極的意義より消極的意義への不可避的轉化を契機として、傳道指導者の意識的努力にも拘らず事實的には社會事業化への漸次的移行を餘儀なくされ乍ら、幼兒保育そのものを中心とする事業として自己を規定しつゝあるのである。換言すれば此事は、我國今日の幼兒保育がその發展過程の特異性にも拘らず、更には又此に關與する當事者の主觀的意欲の如何を問はず、今や一つの新なる高次の水準に向つて必然的にその本來的立場を高め得るに足る客觀的條件を醸成しつゝあることを示すものである。

扱て然らば、斯る客觀的條件と緊密なる關係を有する所の主體的方面の現狀を顧みるに、些か立ち遅れの觀なきを得ないのである。此事は必ずしも斯る客觀的條件の現狀に關する認識不足を意味するものではない。斯る認識は寧ろ相當の程度に於て關係當事者、個人或は集團の胸裡に既に存在してゐるであらうとさへ考へられる。然し乍らそれは飽くまでも主體的條件として外へ向つて發動する處の所謂實踐力としての存在ではなく、却つて主觀の無意識的排他性に依つて彩色された自己の主觀的城廓に立籠り自尊の歪笑を浮べるにも似たる存在である。斯くも言ひ切ることは少しく穩當を缺くものこの非難を招くであらうが、敢て非難の豫想の下に於て尙且つ現時の保育危胎を指摘せんとするの意企を餘儀なくされてゐるのである。我國今日の各保姆養成所に於ける現行保育理論を若干の主流的色調に歸せしむることは必ずしも不可能ではないが、此等各主流的保育理論なるものが各自孤域主然たる逃避の下に而かも内心虎視耽々徒らに自己をのみ清淨視せんとするが如き今日の事情の下に於ては、それは單なる思辨的危險性を多分に包藏して居りそのまゝでは最早何等幼児保育の進展に寄與し得るものではあり得ないであらう。各養成所が夫々の立場に基く特殊性を有することは當然の理であり、その事自體は何等直接的問題たり得ないにしても、斯る特殊性を有すると同時に幼児保育と云ふ根源的共通性を有する存在であることには異論のありやう筈はない。然るに斯るものとしての幼児保育てふ根源的共通性に關する限り、その本質的異同の對立究明を見るに至らざるは抑く何に起因するが故であらうか。幼児保育理論なるものが一域的自給自足を以つて今日尙足り得るまでも言ひ得るのであるか？。それとも幼児保育理論に限つて先驗的に無對立であり得るまでも言ふのか？。乃至保育理論家は對立を好まざる紳士（似而非的紳士）たるべしと云ふのか？。我々は此に答へるに次の命題を以つてしよう。

幼児保育は科學の前夜を低迷してゐる

此事は我國幼兒保育なるものが科學たり得るの前夜に於て一つの大きな暗礁に乗り上げ動きがこれなくなつてゐることを表はすものである。各人各派の所謂主流的保育理論でも謂はるべきものは、夫々既にその独自の流域に於ける可能な一切の功績を果したへて、即ち我國幼兒保育をして今日あらしめるを得て、今やそれ自體その極に達し此上は海洋に注ぐ以外に途はなくなつたのである。此際海洋こそが保育科學である。然るに何事にもあれ科學たるためには嚴正なる自己批判を必要とし自己批判は他との對立に於てこそ成就される。斯くて對立はその實踐を通して新なる高次の統一に向つて兩者を揚棄する。海洋への注出を餘儀なくされ乍ら而かも注出の必然を實踐的に意識せざる所に我國現時の保育の停滯を見るこゝが出来る。要之、我國幼兒保育に於ける主體的現狀を、各主流的保育理論なるものが無益にその本城を固執し何等本質的對立へミ外化されるこゝもなくして只管その主流的主觀の裡に自慰的心境を形成しその無意識的排他性に彩色されて徒に思辨的感情的對立をのみ夢み他流保育理論の漂竊的適用に依る部分的修正に満足し以て唯我獨尊の自信を失ふまいとしてゐるものと規定し得るのである。斯る主體的條件を以つてする限り前述の如き望ましき客觀的條件を把握し得るには尙甚だしき質的距離を認めざるを得ないのである。茲に主體的條件が我國幼兒保育關係者の意識的努力に依存するものなる事は既に述べた所である。保母養成事業の主要性を顧みて、茲に兎言を敢てし、各主流的集團内の保育理論をして單にその主觀内に止まらしめず、我國幼兒保育が全體として直面しつゝある所の當面の主體的課題に對し、その本質的對立を通して具體的規定力たらしめ得るやう、實踐的イニチアテヴを探ることが最も肝要であること信するのである。